

寺村サチコ | Sachiko Teramura

MY SWEET TOXICANTS

2018.3.8 – 3.20

1986年兵庫県生まれ。2010年多摩美術大学美術学部テキスタイルデザイン専攻卒業、2012年多摩美術大学大学院テキスタイルデザイン研究領域修了。現在は群馬県にて制作活動中。

受賞歴に2011年前橋アートコンペライヴグランプリ、2014年2016年グッドデザインぐんま奨励賞受賞。

おもな展覧会歴に、2018年彼女たちのまなざし(アーツ前橋、群馬)、2017年群馬のシルクアーティスト2人展(日本絹の里、群馬)、群馬の美術2017(群馬県立近代美術館)、2016年買える!アート展(越後妻有里山現代美術館キナーレ、新潟)、2015年中之条ビエンナーレ(旧廣盛酒造、群馬)、2014年Upperud Cabinet of Curiosity(Dalsslands konstmuseum、スウェーデン)など。

寺村サチコは染織という技法を駆使して、感情や生命とは何かを問い続ける作家だ。あらゆる関係性と時間の中から感情を抽出し、形を与える。作家自ら「キラキラ」、「ドロドロ」と語る作品には、卑近なまでのリアリティと女性特有のしなやかさが同居している。

形はどれも異様だ。アンバランスな身体、腫れた表皮、不揃いな組織、しかし一方で、ある種の強度も備えている。色鮮やかに増殖する造形物は、そのまま「花」や「ファッション」という女性のアナロジーともつながるが、そこに矛盾や躊躇はない。また、宙を舞う存在の軽さやしなやかさは、物質的剛性や信頼性が失われるほど逆説的に存在が際立つ。偶像を禁じたがゆえ、一神教の神はもっとも「存在」していたという原理に近いといえる。

嫉妬や憎悪でゆがんだ心も、現実との接点を失ってなお命をつなごうとする、その強烈な生命力に寺村は魅了されたのかもしれない。染織によって、寺村は布に生命を宿す。しかし、染料は布の種類により染まるものと染まらないものがあり、常に試行錯誤が必要だ。「ドロドロ」と壊れかけた心も、愛情と反目を繰り返し、いつか受容されることを待ち望んでいるのではないだろうか。